

学びを問う、学びの問いと学びの術

福岡アジア美術館読み聞かせボランティア員 大和亜州歌

「ACT（Assertive Community Treatment = 包括的地域生活支援プログラム）」

統合失調症については、映画『どうしたらよかったか？』を鑑賞し、障害や病の施しの術から遠ざけられることにバイオレンスを感じ、胸が締め付けられる思いを抱きながら、その時間を過ごしました。初めて大型の障害者や高齢者医療施設を訪れたのは、四十三年前、映画『典子は、今』が公開された、当時十～十二歳の頃に養護施設教員の勉強中の担任より、有志で手話や点字を通して福祉を学び、ボランティア活動を経験した中でのことでした。その後二十年程が経ち、当事者家族の大黒柱の言いつけで、聾唖の兄がそれを習うことを禁じられていたと伺ったこともあり、ボランティア以前からも積極的に普通校へ通学する活動をする親御さんとの両側面があるのだと理解しているところでありました。蜷川幸雄氏が市民ミュージカルを演出したというニュースの影響か、五年前に高次脳機能障害の父が演技をしてみたいとの希望が叶えられる人生設計には、現在の居住地域では難しいかもしれませんが、将来的に、そうした個人のささやかな願いが支援プログラムに反映されたら、素敵なことだと想像してみました。フィンランド映画でも、カウンセリングのシーンでは、紆余曲折の様子が描写されていますが、オープン・ダイアログが日本の風土に根付くことを期待しており、その活動を積極的に理解し、参加できるよう学びの視野を広げて行けたらと思っています。

「社会はわからない。」

税法の財務諸表論でとても大切にしているテキスト引用などからのフレーズで、“会計者は、記録係”と“役務提供”は、日本国内に住まう人間誰もが消費税のついた商品を交換した記録がある以上、すべてをデータにした上で、意図的に操作するならして欲しいなと、願います。ですから、ベーシックインカム確保無くして、ボランティア員に対しては、労災のみならず、移動や水分補給、食事に対して記録されることが望ましいことだと感じます。公を知らない状態で、民営化を進めても、結果的に、一連の問題が連鎖的に広がってしまうように感じます。国境を越えた空港で働く人との会話だけでも、社会主義や共産主義国家では、同世代の背景に働く両親の姿を垣間見ることが出来ます。日本におけるその格差は、歴然としており、男性社会からの脱却と民営化の同時進行は、欲を張ることが過ぎ、女子大学率も多い教育体制を掻き消されるようにして話題とならない風潮からも言えるような、日本文化の良さの根本を荒らしてしまわれており、伝わらない世界なのではなく、理解に乏しいわからない社会と言った現状に、“ヒエラルキーをつくらない”、“カリスマを理解しない”は、今後の教育に知恵を出し合って取り組むべき事柄として、なにか困った時にいつでも戻れる基礎、地盤となる教育の水準を広めることが大切だと感じています。

「講義から学んだ、キュアとケア」

福祉の現場が、人間がより人間らしさを取り戻し始めた現在の姿、人生百年時代の中に選択肢を持ち始めたことを大変喜ばしく、感慨深く見つめています。一方、社会人経験の中で、十三年前だったでしょうか、産業カウンセリングを学び、大手通信会社の孫会社の総務経理職の中で、人間扱いしてくれると言われ、とても切ない思いをしました。半世紀も人間をしていると、思春期、産後鬱、更年期障害の対応も、已年なので、身体の脱皮期といましようか、一時「キュア」が必要となる分岐点かと感じられ、当事者も周囲も理解が不十分なのだと振り返ります。心身においては、生涯学習における環境が整い、いつからでも始められ、学び続けられる場所の確保が、その安定と健やかな成長に繋がり、専門家のケアに対する理解に通ずる門扉となることなのだと思います。災害大国日本の国土が今しばらく危機的な状況に、人的と報道されるようになり、文明の利器を魔法使いにでもなれる道具との勘違いを正し、『奥様は魔女』のように、口元が波打つ頃には、認知症の対策に取り組むべき時期と感じられ、それを楽しい夢として捉え、希望を胸に羽ばたく学びがありました。変えよう、何かが変わる、と今尚走り続ける先人から受け継ぐ伴走者が多く育つことを願い、非力ながら、サポート活動に参加できる自己研鑽を続けて参りたいと思います。ありがとう御座いました。